

享月

二

案斤

月見

2005年(平成17年)9月7日 水曜日 14版

東京・山谷でみとりの家を続ける

やま もと まさ き  
山 本 雅 基 さん(41)



ひと

東京・山谷地区に、身寄りのない人の終のすみか「きぼうのいえ」を建てて3年。すでに、26人の男女をみどつた。21の個室は福祉事務所からの紹介でいつも満室。うち

6割は路上生活の経験があり、がんやエイズ、重い糖尿病などの病気を抱える。

当たり前のことができる。生きてきた人が多い。やつてみたいことを聞き、かなえる。花見がしたい、銭湯に行きたい、浅草で買い物をしたい……。元歌手という肺気腫の男性は、「ギターを弾きた

い」だった。手渡すと、息が苦しく歌えながら、上手に弾いてみせた。まもなく入院し、8月末にしてくくなつた。

アルバイトや通信教育を経て、27歳で上智大学神学部に入った。シスターの紹介で、入院中の子どもの家族のための宿泊施設をつくる活動に参加。事務局員として約10年働

いたが、人間関係の悩みからうつ状態になり、1年間実家にこもつた。「家がなければ、自分も路上生活だな」と

思つたとき、行き場のない人

の家づくりが頭に浮かんだ。

看護師の妻と父からの出

資、借金やキリスト教会の寄

付が設立資金。入居者の生活

費にそれぞれの生活保護費を

あて、運営費は寄付でまかな

う。訪問介護の公的サービス

や、学生や僧侶ら約10人のボ

ランティアに支えられる。

「おはよう、と穏やかにい

れる朝が迎えられたら。人生

を生き直す場でありたい」

写真・荒 翁帆里  
文・郭允